

©創通エージェンシー・サンライズ

MG
MASTER GRADE



TITANS

BANDAI





MOBILE SUIT
RGM-79Q

GM QUEL

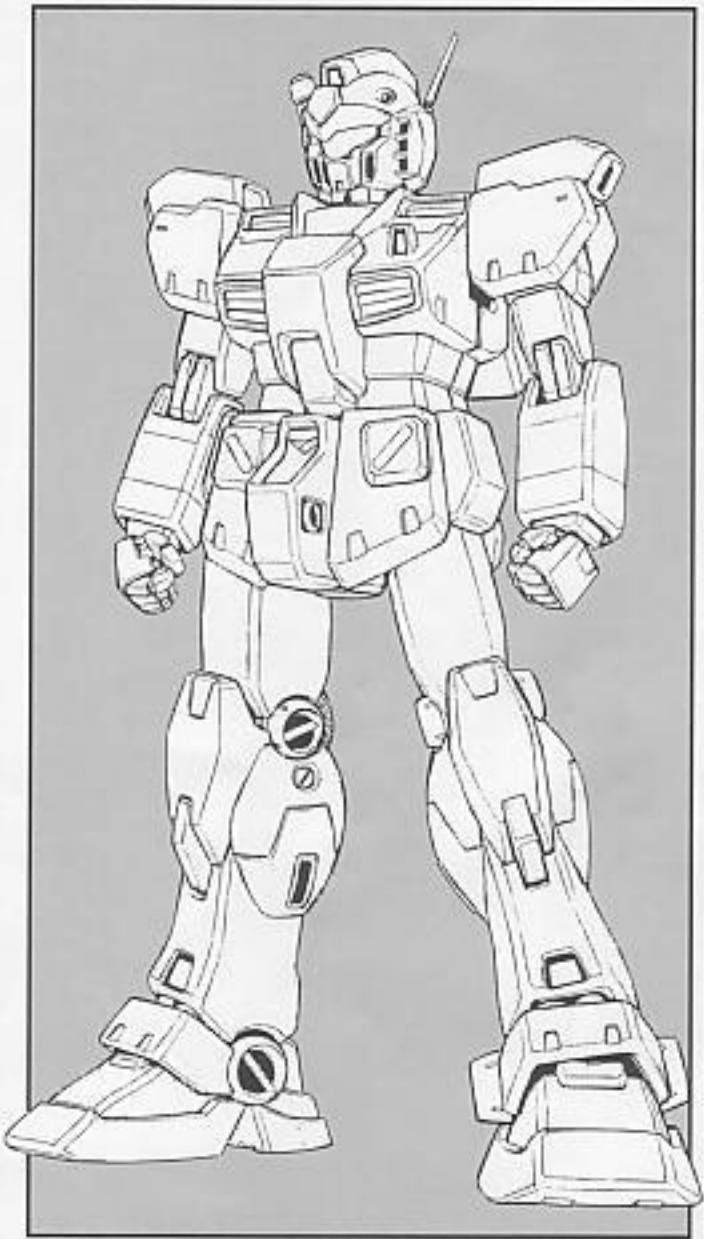
TITANS MASS PRODUCTIVE
MOBILE SUIT



BANDAI 1999 MADE IN JAPAN

地球連邦軍特殊部隊(ティターンズ)
制圧用モビルスーツ
RGM-79Q「ジム・クウェル」
1/100 スケール マスタークレードモデル





RGM-79Q GM QUEL

U.C.0093年12月04日、ジャミトフ・ハイマン准将の提唱により、公国軍の残党狩りなどを主任格とする特殊任務部隊「ティターンズ」が結成された。この部隊は、先駆の「デラーズ紛争」によって看過できない脅威であることが明らかとなつたため、「公国軍接戦」に対する専門の遊撃部隊としての機能を期待されていたため、通常の連邦軍の指揮系統からは独立した部隊として組織された。加えて、この組織はただの遊撃部隊というには不似合いなほど潤沢な運営資金を設立当初から得ていたことも、その期待の大ささを物語っている。

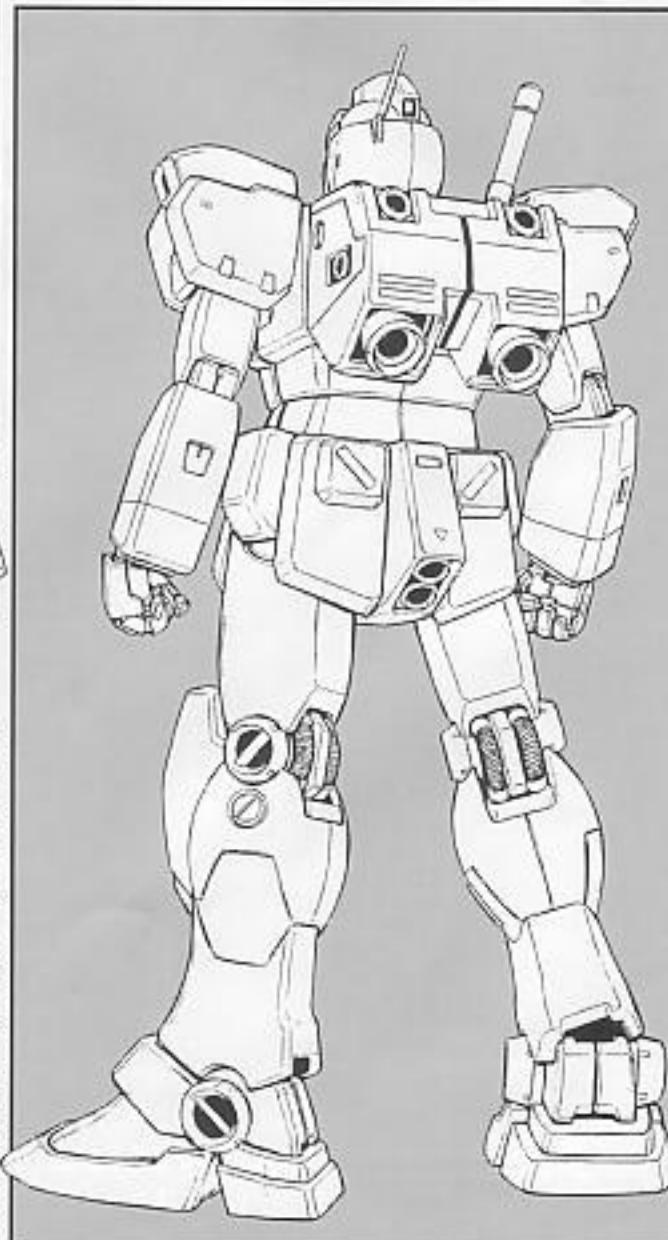
実際には、この組織の提唱から設立までの迅速さの陰には、向こうの政治的な裏取り引きがあったとされている。ジャミトフが元々連邦政府の財務担当の高級官僚出身だったこともあるから、その予算枠も連邦軍本体の整備計画や組織運営経費とは異なる事務手続きを経ていたと言われ、ただでさえ透明度の低い軍事予算の一部を、その予算を立案する側の事務方が恣意的に割譲したとしても、監査院がそれを指摘することはできなかったと言われている。また、その設立自体、連邦軍があらゆる手段を駆使して「ガンダム開発計画」の陰謀を隠蔽していた時期と重なっていた。つまり、あらゆる手段で「支出」のマネーローリングが行われていたのである。

ただでさえ機密扱いの予算枠の配分など、軍隊の思惑でどうにでもなってしまう性格のものなのかも知れない。実際、連邦軍による防衛白書で、「ガンダム開発計画」などは、どこにも見あたらず、その予算のほとんどは「ティターンズ設立の準備資金」及び「コロニー落着事故に備える緊急出動」などと計上されていたのである。

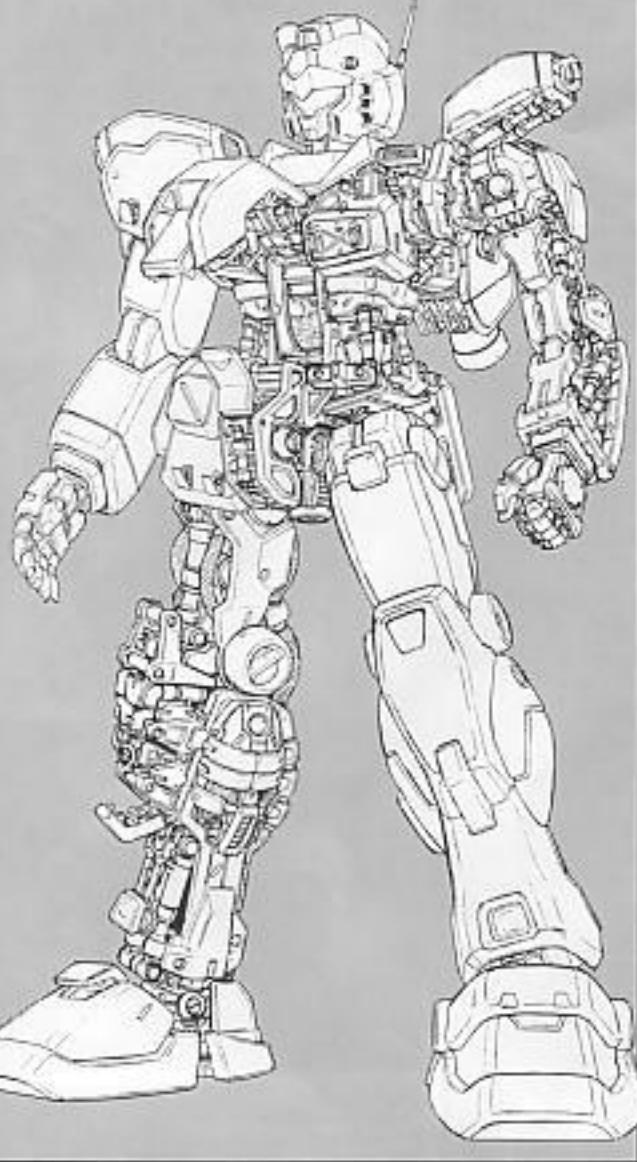
「デラーズ紛争」に関する機密事項や事件の真相は公式記録から抹消され計画そのものも放棄された。そして、この計画によって開発された関連技術もそのほとんどが軍事機密として封印されてしまい、ある時点まで転用も採用不可能となつた。ところが、一定のクリアランスで、その回顧に浴する組織があった。それがティターンズであると言われている。

「ガンダム開発計画」の挫折は、連邦軍内部に対して秘密兵器開発の民間委託という方針に危機感や情報統制上の問題点があることを露呈してしまった。ジャミトフは、一年戦争後の軍事的優位はMSの高性能化によってのみ成されるとして、地球主導の兵器開発の必要性を議会に承認させ、開発における権限を得た。無論、これは公然と承認されたものではなかったが、これ以後、他の部隊に配備されたMSのほとんどが戦時に開発された機体の改裝機だったのに比べ、ティターンズに配備されたMSの多くが新規機であるという実を見れば一目瞭然だろう。また、ジャミトフの唱える「地球至上主義」は地球出身の技官の意欲を大いに高めた侧面もあり、優秀なスタッフを収集する要因のひとつともなっている。

ジャミトフは「地球至上主義者」であり、ティターンズという組織自体が地球出身者のみによって構成されていた。これは軍内におけるある種のイクトとして機能し、戦後からティターンズ設立までに至る期間に開発された機体は、試作機も含め、そのほとんどが何らかの形でティターンズのもとに吸収され、性能評価が行われた後、組織のフラッグシップとなる高性能機が選定された。その機体こそ、RGM-79Qジム・クエールである。



Conceptual illustration: Hajime-Katsuki



BEFORE ARMAMENT

RGM-79Q ジム・クエルは、ティターンズの設立とほぼ同時に配備された。この機体は、元々 U.N.T (Under Normal Tactical - 非通常戦術) カテゴリーで開発されていた機体が原型であり、俗にオーガスタ系と呼ばれる「ガンダム 4 機」バリエーションのひとつ「アレックス」を原器とする機体群に関する。デラーズ紛争の渦中でも、その「オーガスタ系」の機体は実戦に参加しており、RGM-79N ジム・カスタムは、その内のひとつである。ジム・クエルは、開発と配備の時期から、ほぼその直系に当たる機体であると見ることもできるだろう。

無論、これらの機体の建設が実際に連邦軍オーガスタ基地のみで行われた訳ではないが、事実、「アレックス」白体「ガンダム」の簡略化を指標とした設計を施していたのである。そのせいか、「オーガスタ系」の機体は部品調達や生産コストの面においてのみならず、歴後の兵器調達の一時期において特筆すべき存在となっている。

その反面、アレックスの開発が「戦時」の計画に基づいていたため、「オーガスタ系」MS群の存在を指して、戦後に生じた「不度在庫」を処分するための方便であるとする説もある。これはある意味正しく、ある意味で間違っている。アレックスは一年戦争時ににおける「最も後発の機体」であったため、「ガンダム」の実戦データや先行量産型などの生産実績を検証した後に開発されていた。言わば、その時点では既に完成された機体だったのである。

例えば、ビームサーベルのエネルギー供給装置をセンターに配置することによって、左右に 2 基必要だったデバイスを 1 基で済ませるなど、随所にコストダウンとメンテナンスに配慮した設計が施されているのである。この構造

自体、2基あるメインジェネレーターのどちらからでもエネルギー供給が可能なフェイリセイフとなっており、機体の安定稼働を保証する機構なのである。

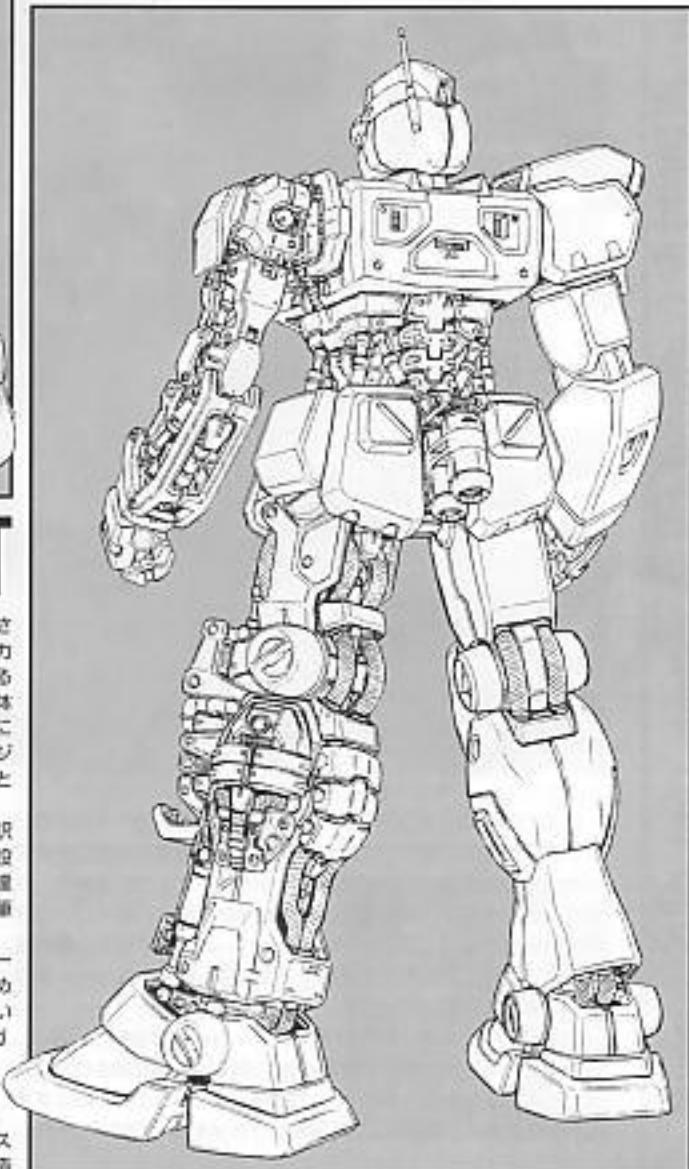
当時、連邦軍本隊は、戦力維持の方策として公国軍から接収した資材や施設を活用し、もっとも効率的かつ合理的な手段で軍備を拡充させていた。ティターンズは、連邦軍に MS 用の部品を供給していた企業とも、連邦軍本体とは別枠で契約を交わし、重の防衛面面とは一線を画した武器調達を実施していたのである。

しかし、公国系の機体の検証が十分に行われた後に指標とすべき「高性能 MG」は、おいそれと開発できるものではなかった。また、時期的に自らの政治生命を危うくする「ガンダム開発計画」の成果を自ら抱え込む訳にも行かなかった。さらに言えば、ジャミットのプライドとして、公国系の技術者を多数擁するアナハイム・エレクトロニクスに依存した主力兵器と、その開発体系を持つことはできないという側面もあったようだ。これらの事情を鑑みれば、RGM-79Q が、ティターンズ設立の時点でもっとも優れた「純連邦製」の機体であったと言ふことになるのである。

かくして、RGM-79Q は「ジム・クエル」という名を与えられた。クエル (Quell) には「反乱などを鎮圧する、あるいは疑念などを抑え込む」という意味がある。また、その機種の表記に隠された意味として、ジム・クエルとは「QUEL = Qualified and Use of Earthly Law = 地球の法と権限を行使する GM」と言う脱もある。

ともあれ、純地球産の技術を結集して開発されたジム・クエルは、その機体色をして「ティターンズカラー」と言わしめる衝撃を宇宙世纪にもたらすことになる。

そして、その後もティターンズは、戦中から戦後にかけてジャフローを中心とした開発のために奮闘していた部署と、それらに従事していた人員をほとんどそのまま抱え込む形で組織ごと継承し、実質的な「ガンダム」後継機の開発を推進させるのである。



Mechanism illustration: BEE-CRAFT

RG/H-79Q GM QUEL
Snap Shot

Parts name of
RG/H-79Q GM QUEL

Parts List

Head &
Arm Unit

Leg &
Weapons

Body Unit

Final Assemble

THE NEW ONE H-79Q GM QUEL

ARTH FEDERATION SPACE FORCE TITANS



U.C.0083年12月04日。ジオン公国軍の残党狩りを主任務とする特殊部隊ティターンズが結成された。連邦軍の財務担当高官であったジャミトフ・ハイマン准将を懲罰とするこの組織は、地球至上主義を掲げ、連邦軍という権力体制の中に、もうひとつ別の権力基盤を創り上げた。そして、スペースノイド排斥の急先鋒であるバスク・オム大佐を組織の総指揮官に据え、エリート集団として急速に台頭していった。

ジム・クウェルは、設立間もないティターンズの象徴として、先陣を切って属徒の頭圧や脅威攻略に活躍した。配備された数は決して多くはなかったものの、特徴的なフォルムと威圧感のあるカラーリングは、見るものに圧倒的な存在感を植えつけていった。

そして0085年07月31日、「30パンチ事件」が発生する。その日、サイド1の30パンチにおいて、大規模な反地球連邦政府運動の集会が開催されていた。それに伴い、各地でデモやサボタージュが散発されたため、対応に苦慮した連邦の駐留軍は、大規模な暴動に発展することを恐れ、ティターンズに暴徒の鎮圧を要請した。

要請を受けたティターンズは、一切の警告も通知もなく、コロニー内部に毒ガスを注入し、30パンチの全市民300万人を虐殺した。この事件は報道機関を受け、真相が公表されることはなかった。これによってティターンズの発言力は一挙に増大したが、その一方で、バラバラに反地球連邦政府運動を行っていた組織を急速に結束させることになるのだった……。

RGM-79Q GM QUEL

RGM-79Q GM QUEL
Snap Shot

Parts name of
RGM-79Q GM QUEL

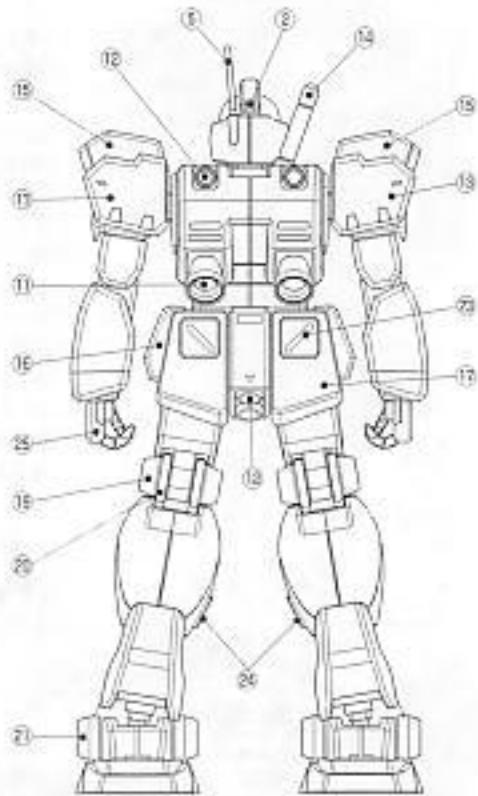
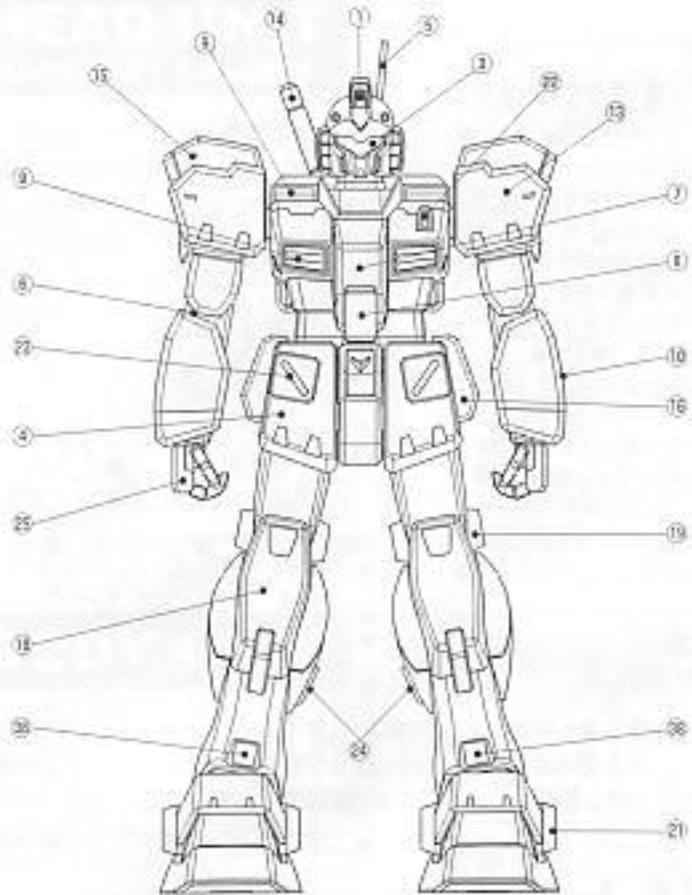
Parts List

Head &
Arm Unit

Leg &
Weapons

Body Unit

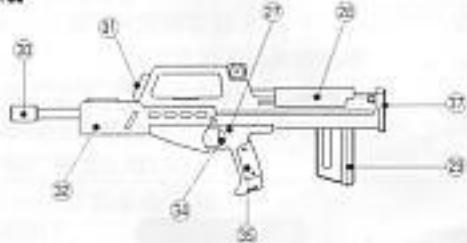
Final Assemble



- | | | | | |
|-------------------|---------------|-----------------|------------|-------------------|
| ① メインカメラ | ⑤ インテーク／ダクト | ⑨ リアアーマー | ㉓ マニピュレーター | ㉗ ナローレンジセンサー |
| ② リアカメラ／センサー | ⑩ シールドマウントラッチ | ⑩ ニーアーマー | ㉔ スイッチ | ㉘ トリガー |
| ③ サブセンサーアレイ | ⑪ メインスラスター | ㉑ ニージョイントアーマー | ㉕ マガジンキャッチ | ㉙ グリップ |
| ④ フロントアーマー | ⑫ サブスラスター | ㉒ エネルギーサプライケーブル | ㉖ バッド | ㉚ フォアグリップ |
| ⑤ マルチロッドアンテナ | ㉓ ショルダーアーマー | ㉗ アンクルジョイントアーマー | ㉗ マガジン | ㉛ ショルダーストック |
| ⑥ インターナルジョイントシステム | ㉘ ビームサーベル | ㉘ サブセンサー | ㉘ マズル | ㉜ マルチセンサー |
| ⑦ コクピットアッパー/ハッチ | ㉙ ショルダースラスター | ㉙ コンバーターシステム | ㉙ サイトセンサー | ㉘ セーフティーラッチ |
| ⑧ コクピットボトム/ハッチ | ㉚ サイドアーマー | ㉚ サポートスラスター | ㉚ ハンドガード | ㉚ アンチヒートコーティングエリア |

注) この機体は連邦軍のMS適性配備開発計画によって開発されていたものだが、ティターンズ設立に伴って計画が変更され、U.C.0083年12月、積装中のアレ・ギザに投入、配備された。

■ GM RIFLE



■ SHIELD



■ BEAM RIFLE



■ BEAM SABER



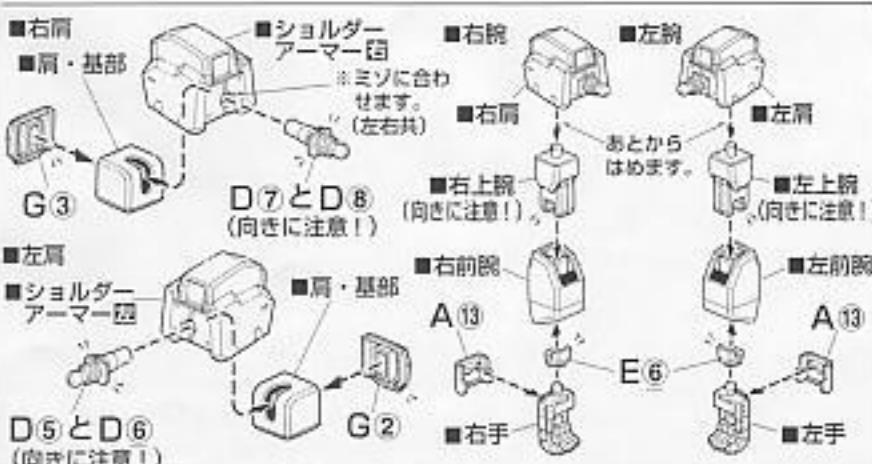
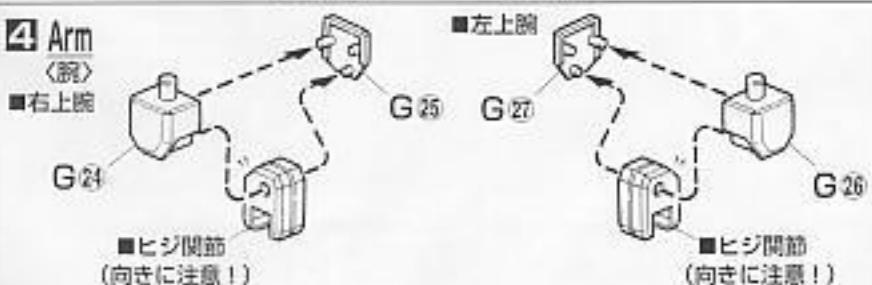
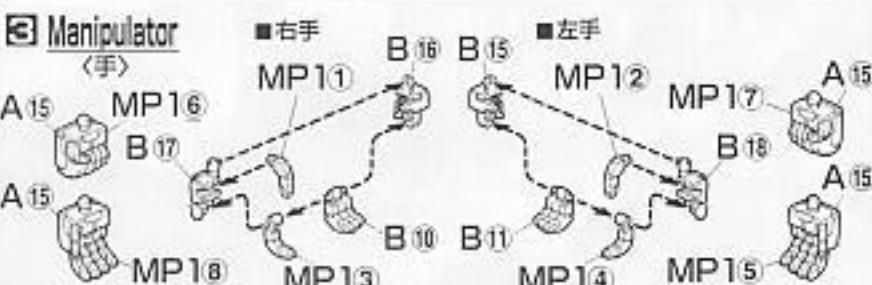
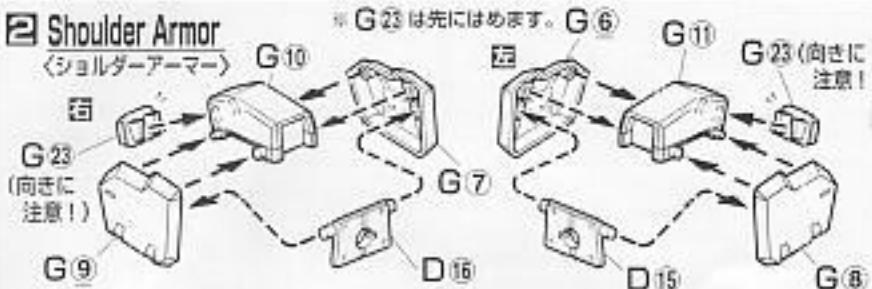
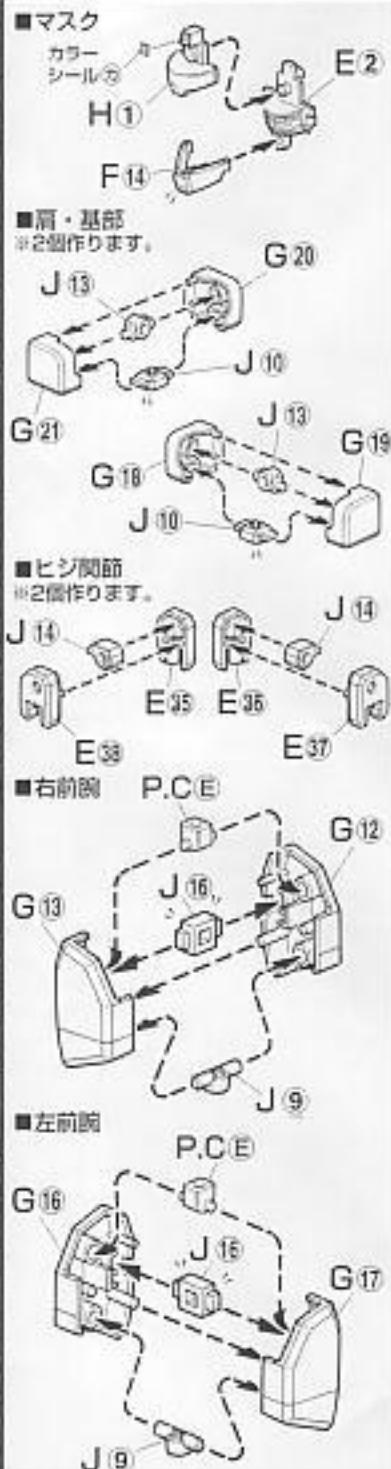
△注意
必ずお読みください

- この商品の対象年齢は「15才以上」です。(説明書が有りますので、安全上15才未満には適しません。)
- 小さな部品が有ります。口の中には絶対に入れないでください。窒息などの危険があります。
- ビニール袋を頭から被ったり、脚を覆ったりしないでください。窒息するおそれがあります。
- 小さなお子様のいるご家庭では、お子様の手の届かないところへ保管し、お子様には絶対に与えないでください。

(組み立てる時の注意)

- 組み立てる前に説明書をよく読みましょう。
 - 部品は番号を確かめ、ニッパーなどできれいに切り取りましょう。
切り取った後のクスは捨ててください。
 - 部品の加工の際の刃物、工具、塗料、接着剤などのご使用にあたっては、それぞれの取扱説明書をよく読んで正しく使用してください。
 - 部品の中には、やむをえず、とがったところがあるものもありますが、気をつけて組み立ててください。
 - 溶接にはより安全な「水性溶剤」のご使用をおすすめします。

*サーベル1バーツとマニピュレーター1バーツの記号については、説明書の中ではそれぞれSB1とMP1と表示しています。



FOUNDATION OF TITANS

宇宙世纪0083年12月9日。公爵邸内に開催されたティターンズは、設立当初から、連邦軍の資格を無視するかのように「地団出身の人員のみによる結婚機関」の認可などを経て、独自に新設計のMSを開発する機関まで手に入れていった。さらにジャミットフは、連邦軍の機関を上回る規模で構造されていたアレ・ギザの運河橋まで手に入れていた。この橋は、連邦、貴族したパーソンガムの後継者として、同場をはるかに上回る彼らの精神、運用能力を持つ強力な艦隊であった。そして、ティターンズの設立と同時に専用機として配備された「ジム・クエール」は、当荷物船の高性能性であり、宇田の體のごとく漆黒に染まつたその機体は、ティターンズが手に入れた「力」の本底を何より雄弁に物語っていた。それでもその威容は、ディーズ船の海中にあった人々にとって、充分に期待を抱かせるものであったことも事実である。

AGAINST A RIOT

宇宙世纪0084年4月30日、月面のエアース市近郊の中堅企業パンガー工業の労使交渉が争議に発展し、車掌が乗り出す規制の事件に発展してしまった。パンガー工業はコロニー公社の下請け業者で、蒙絶悪化に伴う大規模なレイオフが騒動の骨頭であった。その原因が、連邦政府によるコロニー施設計画の変更によるものであるとして、元社員を名乗る男がMSを持ち出したのである。その騒動に束じ、ジョン・強烈を名乗るゲリラが現場に登場し、人質を取って工場に立てこもった。そこに、折からジム・クエールの儀式訓練を行っていたティターンズの小隊が駆けつけ、5分ほどでMS3機とジュニアMS5機が合計の十数名の武装ゲリラを沈黙させてしまったのである。この事件は、ティターンズ設立早々の快挙であるとして歓迎された一方で、同年6月17日の連邦議会における「地球連邦の現状推移決定」の選出にいたとも言われている。



TITANS COLOR

宇宙世纪0086年5月、およそ半年前の「30パンチ事件」を背負として、ヨーク一帯の権勢を握ったティターンズは、9ヶ月前に竣工したばかりのグリーブスに連邦の技術士官を多数囚出し、新たなMS開発に乗り出していく。そして同年12月、既存のMSとは全く異なる機体「ムーバブル・フレーム」を有する戦闘用機体、RX-178 ガンダムMK-IIがロールアウトした。この機体は、ジム・クエールと同じ「ティターンズカラー」に塗装され、連邦にわたりトライアルが行われていた。そして、ジム・クエールなどアグレッサーとして、正面的な運動性を發揮していた。しかし、その途上で様々な問題点も明らかになっていた。技術的には数ヵ月で仕様化するだろうと予測する技術者もいた。しかし、この機体と機体色が持つ意味は、全く別のところにあった。高いガンダムの出現によって、宇田世纪は再び戦士に巻き込まれようとしていた……。

MARKING WEAPONS



機体各部をリアルに再現するナンバー表記、注意書き等のマーキングシールをセット。形式番号等のマーキングを要望の高いガンダムデカールで再現しました。

Engineer Anna

ニナ・バーブルトンを1/20スケールのフィギュア(人形)で再現。



PAINTING

よりリアルに仕上げたい場合は、下の基本色をご覧ください。
塗装にはより安全な「水性塗料」のご使用をおすすめします。

頭・手・足などの塗装色。

ホーリーブルー(50%)+コヨイトナー(25%)+グラウンド(10%)+レッド(5%)

胸・腰などの塗装色。

エフイ7478-(50%)+コヨイトナー-(30%)+グレー-(15%)+レッド(5%)

関節・内蔵フレームなどの塗装色。

エフイ7478-(30%)+コヨイトナー-(30%)+レッド(30%)+ホワイト(10%)

エインタークなどの塗装色。

オレンジイエロー(60%)+イエロー(40%)

各バーニア内側などの塗装色。

モンザレッド(100%)

センサーの塗装色。

シルバーの上に、蛍光グリーン(100%)

靴底などの塗装色。

ミディアムブルー(50%)+グレー(45%)+レッド(5%)

FRONT VIEW



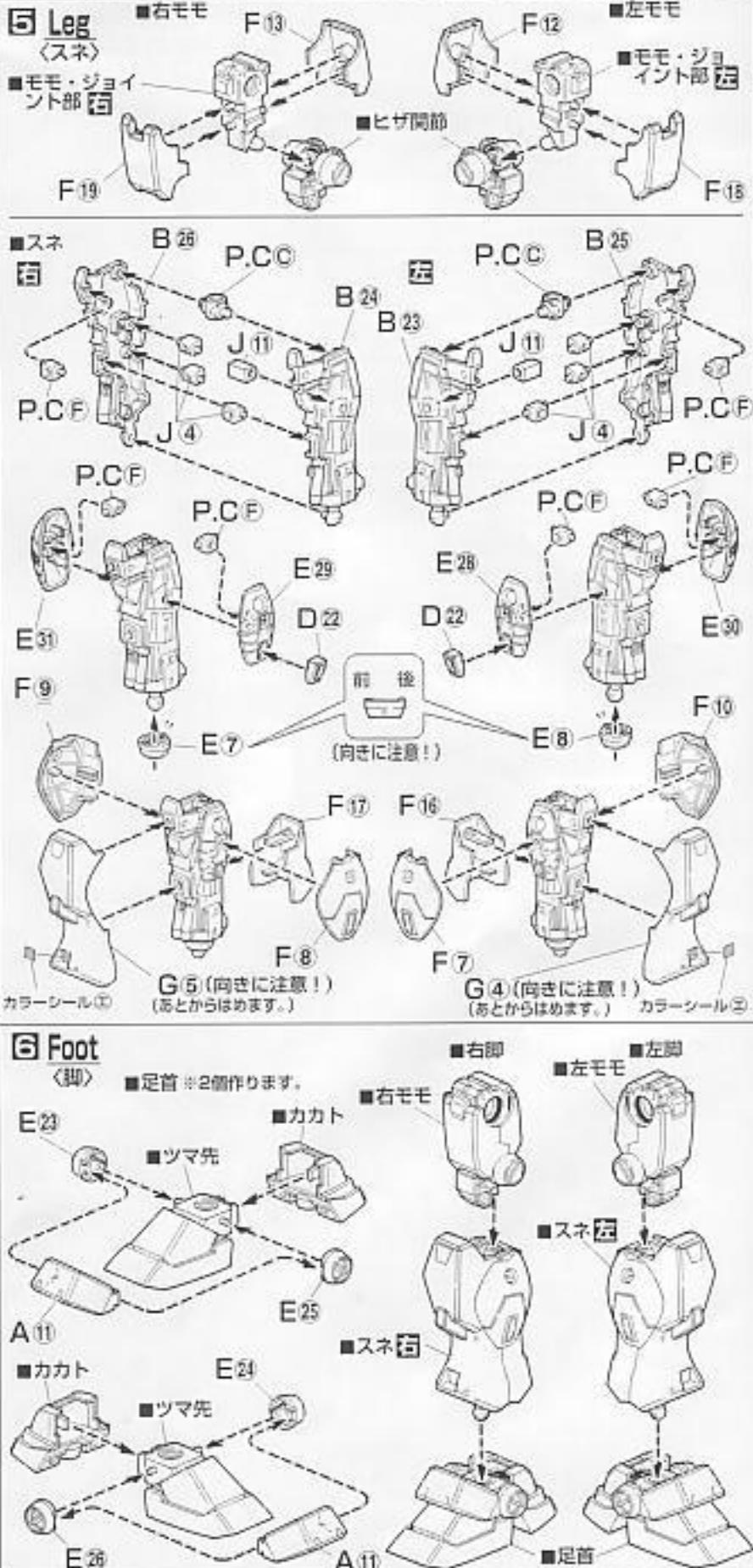
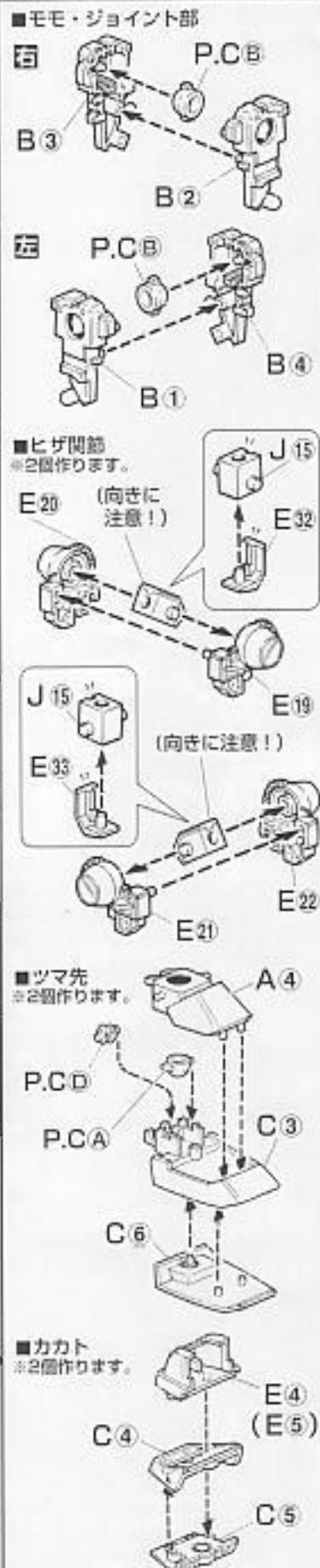
REAR VIEW



↑ 開閉式のコクピットハッチをはじめシートやバイロットを再現。
↓ 背部パックパック内部のメカニックやバーニア等、細部ディテールを表現。



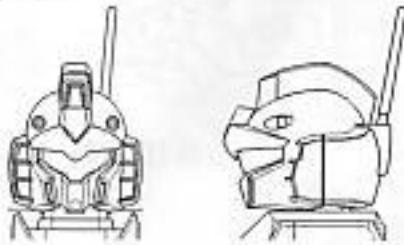
↑ 脚部の装甲は、脱着可能。内部メカニックをリアルに再現。



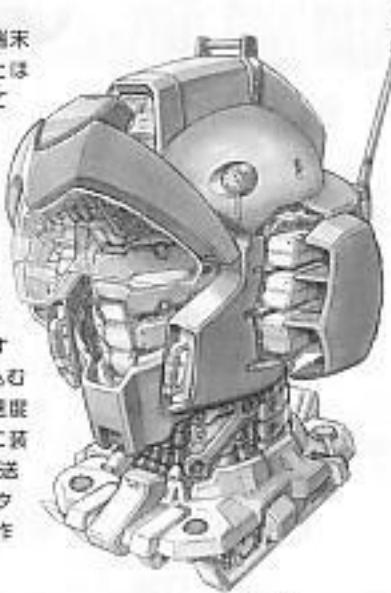
HEAD UNIT

HU-0079N11 Serial005

RGM-79Qの頭部の構造は基本的にRGM-79Nジム・カスタムと同等だが、下方視界やサーモグラフ及び動態センサーなどのレンジが拡大されており、より“コロニー内戦闘”に配慮したデバイスに換装されている。



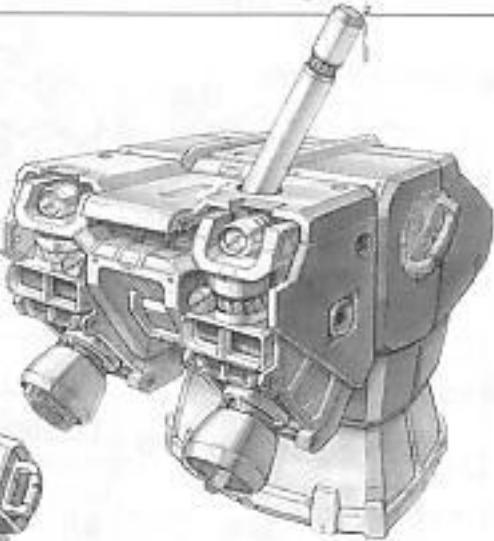
RGM-79Qに搭載される光学端末は、RGM-79Nジム・カスタムとは同じものだが、基本性能が向上しているほか、広範の“対人センサー”など、公安任務にも対応可能な副次的な機能が追加されている。加えて、それまでに稼働していた工廠の中でも品質の安定している部品を選定し、さらに歩留まりのよいデバイスを選びすぐって組み立てられている。また、ガンダムタイプに匹敵するコ・プロセッサーフレームを組み込むことで、センサーの解析能力や処理速度を向上させている。さらに、側頭部に装備されるロッドアンテナは試作機並の送受信能力を持っており、機体のモニタリングはもとより、一説には遠隔操作さえ可能だったという説もある。



BODY UNIT

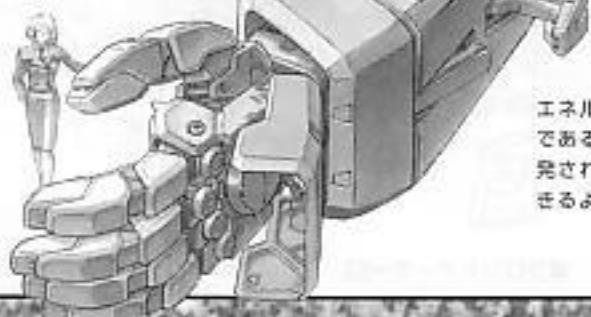
RGM-79Qのコクピットは、80年代前半に供給された既存の機体と基本的にほぼ同等の物である。内装なども79N型とほとんど同じだが、狙撃任務にも対応可能のように、照準装備に若干の改装が施されている。

RGM-79Qの胸型構造は、対戦末期に開発された二層構造の複合インテーク／ダクトを持っている。この構造は、俗に“オーガスター系”に分類される量産型に多く採用されているもので、メインジェネレーターの稼働効率と安定稼働を保証するシステムである。特に79Qは、その原型となった機体の構造をほぼそのまま踏襲していると言われる。その上、腹部には通常のコクピットを装備しているため構造に余裕があり、スラスター推力や最大戦闘速度の限界時間が向上及び延長されている。



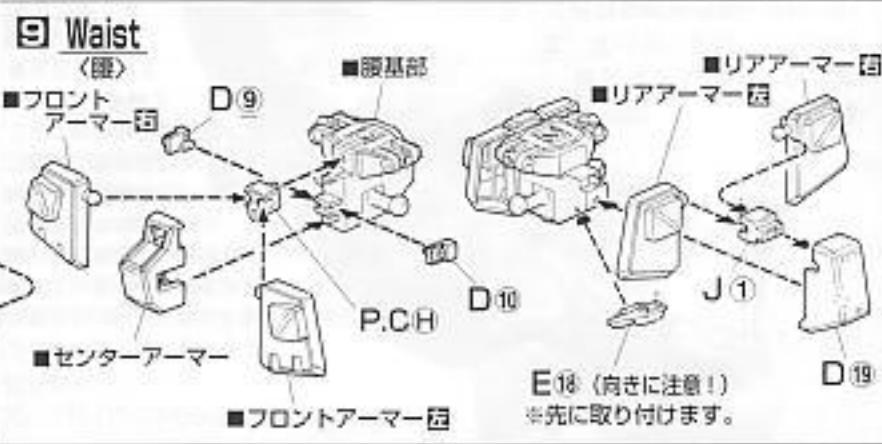
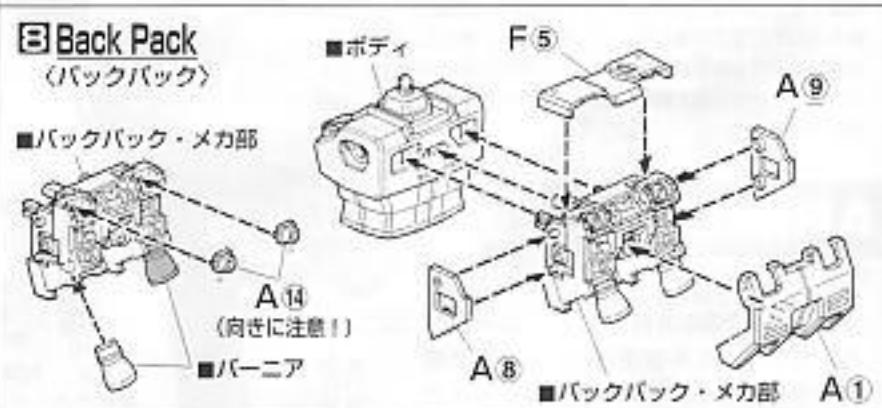
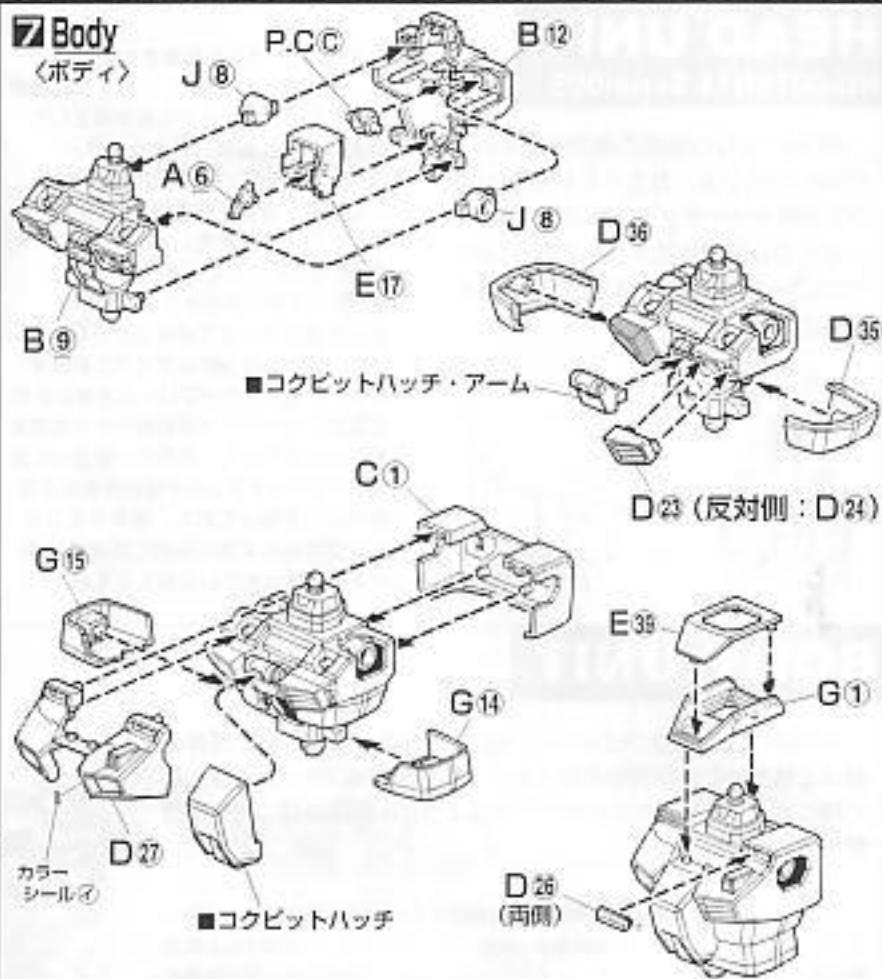
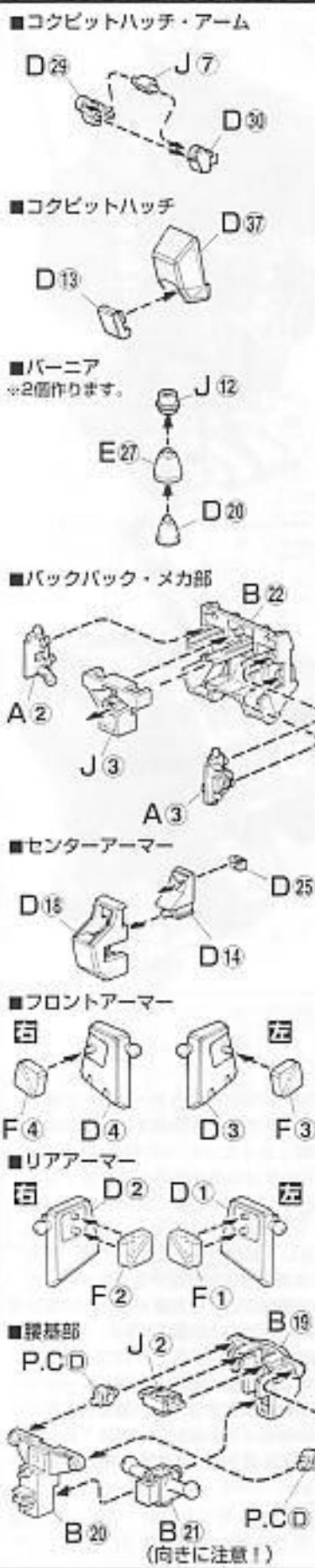
ARM UNIT

RGM-79Qの腕部には、ムーバブル・フレームにも採用されている関節構造の基礎となるノウハウが新たに採用されている。この構造はヒンジそのものが外部に露出しない上、エネルギー吸収装置も可能であった。

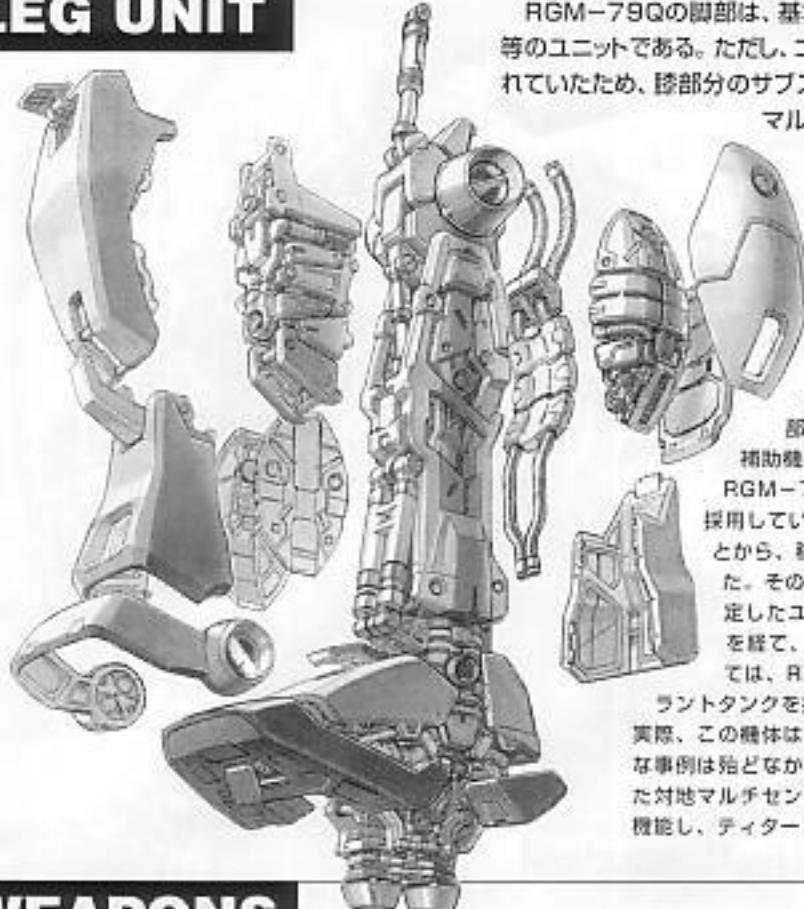


RGM-79Qに限らず、MSの生産性やメンテナンスを改善する方法は恒常的な課題となっていた。その解決法として、装甲そのものと可動部分の構造を完全に分離するという概念が発想され、それが初めて採用されたのがこの機体である。シミュレーションでは充分実用に堪え得る構造であるという結果が出ていたものの、完全に機能するかどうかは実戦投入で検証するしかない。そのためもあって、この構造は比較的加重や負荷が少ない腕部のみに限定して採用されているのである。

その後、この構造は後に開発されるムーバブル・フレームそのものの原型となり、付随するオプションラッチャやエネルギー吸収装置などの構造そのもの的基本となるのである。そのため、この機体腕部のオプションラッチャは、後に開発されるRX-178などの装備をほぼそのまま装着することができるようになっているのである。



LEG UNIT



RGM-79Qの脚部は、基本的にRGM-79Nジム・カスタムと同等のユニットである。ただし、コロニー内戦闘の他“対人”運用も想定されていたため、膝部分のサブスラスターはオミットされ、脛部分下方にマルチセンサーが装備されている。

MSの脚部は、どのような運用を想定しているにせよ、最も重要なユニットであることに変わりはない。空間戦闘においては多少事情は異なるが、MSという機動兵器は基本的に“巨大な人型”であることが最重要なファクターである。そのことによる汎用性がMSの最大の特徴でもある。実際、一部の例外を除いて、MSの脚部は無重量空間においても重要な部位であり、補助機動装備としても優秀なユニットであった。

RGM-79Qは、脚部には画期的な構造を試験的に採用しているものの、実働部隊の主力兵器でもあることから、稼働においての確実性も併せ持つ必要があった。その意味で79Nの基本設計は、信頼性が高く安定したユニットであったため、多少の機能付加などを経て、ほぼそのまま採用されている。任務によつては、RX-78NT-1のように、脚部に大型プロペラントタンクを換装して高機動戦闘に対応することも可能。実際、この機体はどのような局面でも稼働に支障が出るような事例は殆どなかったらしく、特に、前面に新たに採用された対地マルチセンサーは、対人射撃戦などにおいても有効に機能し、ティターンズの任務の完遂に貢献した。

WEAPONS

HFW-GR・MR82-90mm

BAUVA・BR-S-85-C2

XB-Q-1065H

RGM・M-Sh-ABT/S-00195

BEAM RIFLE

ビームスフレーガンの生産ラインを転用して生産されたビームライフル。規格的にはローエンドだが、フォアグリップの追加などによって使い勝手が向上し、稼働時間や出力なども改善されたため、後の機体の標準武装となっている。



GM RIFLE

90mmの実弾を射出する武器。弾体はケースレスで非燃焼弾がないため、高速で飛び散る空薬莢などで市街地や都市に余分な損害を与えることがない。宇宙空間での戦闘などにおいても余分なモーメントが発生しないため使い勝手が良く、80年代初期に多用された。



BEAM SABER

80年代になって本格的に普及したセンター配電のペースユニットの規格に対応したビームサーベル。口尾は既存のものと同じだが、エネルギーCAPシステムでもマニピュレーターを介してのエネルギー供給でも稼働が可能なデュアルサブライテバイスが採用されている。



SHIELD

耐弾性や耐ビーム機能よりも運動エネルギーの減少や実弾を跳弾させるための形状研究から開発されたシールド。一年戦争末期に基本設計が完成し、以後、改良を重ねている。表面には耐ビーム処理が施されているほか、ジムライフルの30連マガジンを2つ装備可能。

ENGINEER

NINA PURPLETON【ニナ・パープルトン】



アナハイム・エレクトロニクスのシステムエンジニアで、月面都市フォン・ブラウン出身の生粋のルナリアン。「ガンダム開発計画」において、GP01(Fb含む)およびGP02Aのシステムソフトを担当する。入社早々、MSの稼働用ソフトウェアを支援する汎用プログラムを構築。その基本アーキテクチャは、機体はジムでも操作感覚はガンダムに匹敵するかのようなマルチタスクを可能とし、その実績を買われてガンダム開発計画に参画することになった。このプログラムはムーバブル・フレームが主流となるまでの期間、MSの機能強化に不可欠なものとなり、当然、ジム・クラウルのプロセッサーにもインストールされている。

RGM-79Q GM QUEL
Snap Shot

Parts name of RGM-79Q GM QUEL

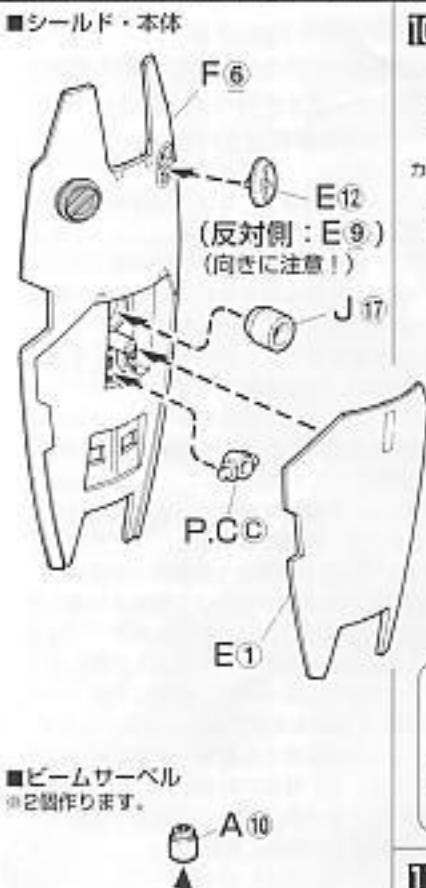
Parts List

Head & Arm Unit

Leg & Weapons

Body Unit

Final Assemble

**10 Weapons**

<武器>

■GMライフル

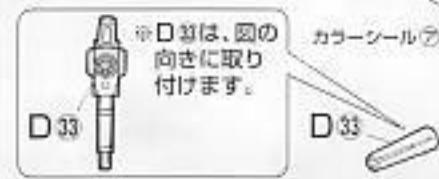
カラーシール⑦

E3

E10とE11



■ビームライフル

■ロケットランチャー
(2個あります。)

■シールド

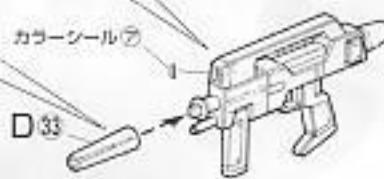
E13とE14

E16

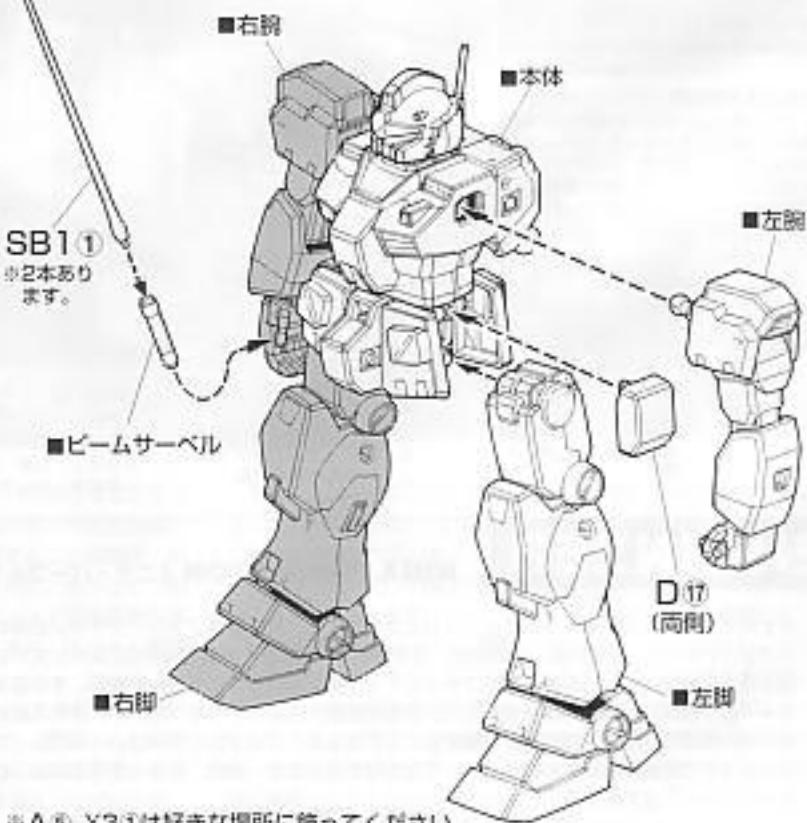
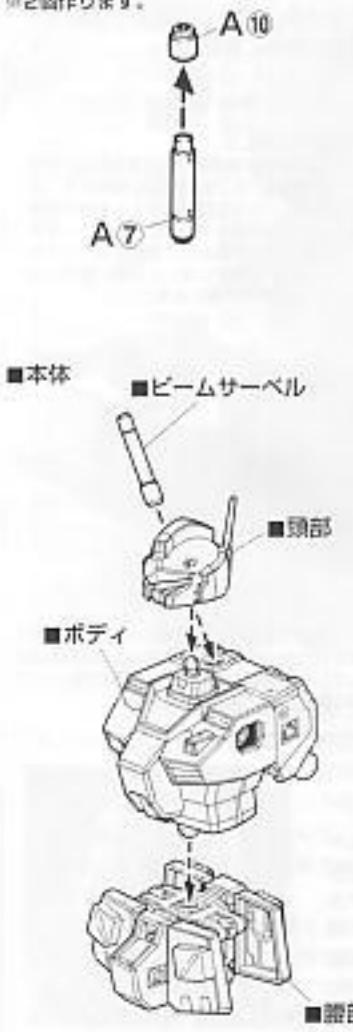
E34

E15
(両側)

■シールド・本体

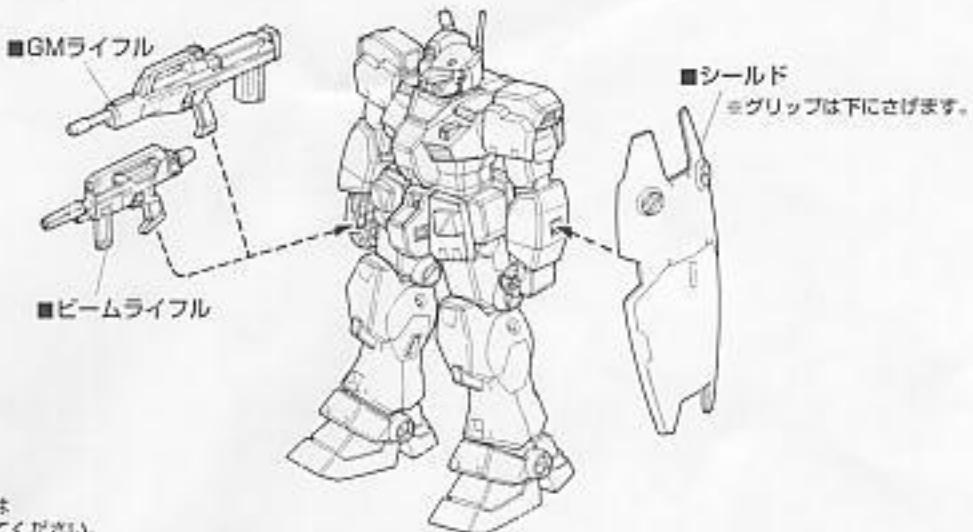
**11 Final Construction-1**

<完成-1>



12 Final Construction-2

<完成-2>

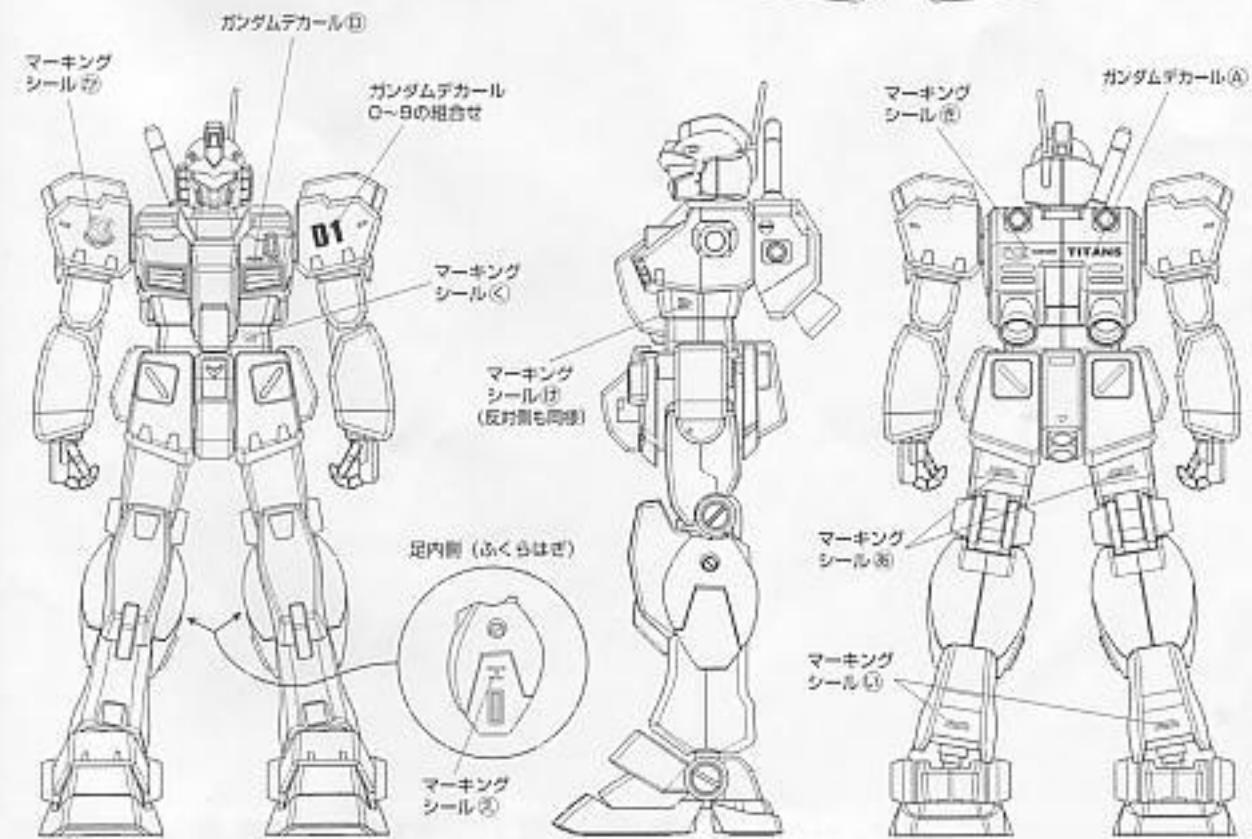


※各武器を手に持たせる時は
指が可動する手首に替えてください。

Seal

<シール> ガンダムデカールのはりかた。

- 1.転写するマークを大まかに切ります。
- 2.転写する場所に軽く押さえ、ボールペン等の先の尖い物で上から軽くこすりつけます。
- 3.シート部分を静かにはがし、転写していない部分があれば、もう一度転写していない部分をこすります。



*余ったマーキングシールやガンダムデカールは好きな所にはってください。



協力：ホビージャパン



地球連邦軍特殊部隊（ティターンズ）

制圧用モビルスーツ

RGM-79Q 「ジム・クウェル」

1/100 スケール マスターグレードモデル

RGM-79Q GM QUEL
TITANS MASS PRODUCTIVE MOBILE SUIT

Scanned by Dalong.net